

## 中国・柳州シンポジウム参加記録より

### 柳州日記

柴田 幸夫

(会員 本匠村三股)

柳州<sup>りゅうじゅう</sup>は中国広西チワン族自治区の中部に位置する華南の工業都市である。近郊に化石人類遺跡が多いことで知られている。

北京自然博物館副館長周国興先生から、再三招待状をいただいたこと、また、別府大学名誉教授二宮先生の誘いもあつて考古学には全くの素人が、この柳州で開かれた、日中の学者による「中国古人類、史前文化淵源関係国際学術研究討論会(柳州シンポ)」なるものに出席する破目となつた。参加資格は「聖嶽人<sup>せいりたけじん</sup>」発見地の教育長ということになる。以下柳州シンポ参加日誌である。

【平成六年十一月十八日】

気分重く家を出、夕刻博多に着き駅前のサンライトホ

テルに泊まる。翌朝寝遅れて、顔も洗わず福岡空港に駆けつける。

【十一月十九日】

空港に八時半集合、搭乗手続をすませて十時三十分発、台北經由香港行に乗る。十四時香港着、機内食を二度食う。台北から時差一時間。

参加者は東京・大阪・福岡空港から出発し香港で合流する。福岡利用者は別府大関係者の外に鹿児島大・琉球大・各地教育委員会職員計十三名、因みに東京・大阪利用者には各四名であつた。

合流後香港日通旅行社のバスでレストラン「四川楼<sup>しせんろう</sup>」に向かい、四川料理の豪華な夕食、同じテーブルの鹿大の小片<sup>おがた</sup>先生に初対面の挨拶をし、聖嶽を今回の発表に取り上げて下さつたことに謝意を表す。先生は聖嶽人骨の発見者、故新潟大医学部教授小片保<sup>おいたけ</sup>氏の甥御<sup>おひこ</sup>さんで、現在鹿児島大歯学部部長をされている人類学者である。

十九時十五分香港発桂林<sup>けいりん</sup>へ、二十時十五分到着。乗客は殆ど日本人、スチュワーデスは美形、控え目なサービスであつたが機内は清潔で飛行は快適であつた。桂林飛

行場は閩の中、中国の照明は暗い。空港は閑散としていた。通訳つきの出迎えのバスに乗りホテルへ。桂林ホリディンホテルは日本の高級ホテル並みの立派なものであった。二宮先生と同宿で心強い。中国滞在中ずっと部屋が同じで、はぐれ鳥にはありがたいことであった。中国の初夜を深々と眠る。気温は春先なみ、オーバーコートは不要であった。

【十一月二十日】

午前中別府大学がチャーターしたバスで市内観光、時間都合で漓江下りができなかったのは残念なことであつた。ごみごみした街中を過ぎて最初に行つたところが甌皮岩遺跡、あいにく休館日で展示物を見ることはできなかった。前庭で京大の片山先生、岡山大の稲田先生がこの遺跡について説明してくれた。それにしても遺跡周辺の手入れの悪いこと、建物の粗末さには恐れ入つた。次は象鼻岩、桂林の景勝地の一つである。山全体の形が象が漓江の水を飲んでる姿に似ているところから名付けられたといわれる。大人がボート遊びを楽しんでいた。最後は市民病院、東洋医学の講義を聞き治療の実演を見、

實際体験をしたがマカ不思議なことはかりであつた。医師や助手の日本語の達者なことにも驚いた。病院側の狙いは漢方薬の販売にあつたようだが、結構値段が高かつたせいか買手がなく気の毒な気がした。

旅行中の楽しみの一つに中国料理があつた。その美味なること「天下に甲たり」である。この日の昼食もなかなかのものであつた。食事中、書画骨董店も兼ねたこの主人の、大阪弁を駆使しての書画の売り込みの口上と、日本側の応酬が面白く笑わされたが、結局同志社大の鈴木先生は掛軸を買わされることになつた。

食事後二宮先生と通りを歩いてみた。ライターが一元、たばこが二、三元、酒が七、八拾円くらいであつた。一元は十三円前後だから安い。

十四時五十分桂林発柳州に向かう。汽車の旅である。沿線の風景に息をのむ。車内販売のつまみ類は二、三元だがうまい。二宮先生はちびりちびりと手酌ではじめる。酒がお好きのようである。三時間半ぐらいかかって柳州に着いた。宿舎は柳州飯店、中国側も期間中このホテル

に滞在した。旧知の日中の学者同志が、「やあやあ」と挨拶を交わしてロビーは華やかな雰囲気があった。

【十一月二十一日】

午前中自由行動、二宮先生は打ち合わせ、一人雨の中を柳宗元ゆかりの柳侯公園を探して歩くが見つからなかった。午後から会議が始まった。一時三十分出發、柳州政府のバトカー先導で、日中の学者を乗せたバスやワゴン車が郊外にある白蓮洞に向かう。先導車は前を行く車に右に寄れとか止まれとか声高に指示し、渋滞を捌いてくれたが権力的でこちらが恐縮したような次第であった。会場は白蓮洞下にある博物館である。博物館といっても平屋の粗末なもので、その中に講義室と展示室、それに職員の住居らしいものがある程度で、日本の博物館のイメージとはほど遠いものであった。便所は二、三十軒離れたところにあった。人目をばばかりながら、尻をむき出しにして大をなさねばならないには辟易した。

白蓮洞中に入り周先生の講義を聞く。この洞穴の価値について賣蘭坡先生は、「この洞穴の特徴はそれぞれ異

なる地層中から、各年代を代表する資料がそれぞれ発見されたことである。ここは旧石器時代から新石器時代に至るまで、すべてに重要で代表的な資料があり、旧石器時代から直接新石器時代に移行したのか否か、間に中石器時代をはさんでいたのかどうかをうまく説明する数少ない古文化遺跡となる条件が詰まっている。」と述べている。

ホテルに帰って六時三十分から開幕式、一応背広姿で出る。始まる前に周先生、小片先生と一緒に写真におさまってもらったが、巻取り中の操作ミスで駄目になり残念であった。開幕式は一時間にわたるセレモニーとなった。日本側から橋、二宮先生の挨拶、中国側から賣蘭坡周国興、安志敏、ベトナム代表、柳州政府代表等の挨拶があり、そのあと立食パーティに移った。周先生が通訳を連れてわざわざ私のところに来て挨拶をしてくれた。周先生に面識を得たのは先生が来日の際、別府大での講義を拝聴したこと、その後聖嶽洞穴を案内したご縁による。周先生のねらいはどうかやら聖嶽と、白蓮洞との研究上の関係を結ぶことにありそうだ。そうでなければ専門

家でもない私を招待するわけがない。疑心暗鬼ぎしんあんきそのへんのところを二宮先生と遅くまで話す。

翌日の柳州日報の一面の大見出しは、「中日古人類与史前文化淵源関係国際學術検討会昨開幕 探索研究人之初推動促進人之誼」とあった。

【十一月二十二日】

天気は回復する。白蓮洞へ。周先生の講義がありそのあと質疑が交わされた。岡山・東京・同志社大の教授らの質問があった。昼食場は会場よりかなり離れた所にある。昼食後日程の変更があつてそのままザボン園に直行したが、これは中日シンポを熱烈歓迎する園主から接待の申し出があつた由、ここからみる風景はよかつた。みやげに全員二箇所ずつ頭ほどのザボンをいただいた。そして広くもないザボン園、園主にすれば大変な出費であつたらう。その厚意に感謝し日本まで持ち帰つた。

その後会場に戻り、三班に別れて白蓮洞入洞、館内陳列品見学、白蓮洞とつながっている鍾乳洞の見学をした。学者連中の人気は陳列品にあつた。私は鍾乳洞を選んだが、その壮大さに度胆どきまをぬかれた。

三時三十分ごろ車を連ねて大龍潭遺跡を見学する。ここで発見された人骨は四体で、一万年前後のもの成形態学上、南方モンゴロイド類型の主要な特徴を表わしているという。それは後期旧石器時代の代表である柳江人と近く、また、新石器時代人群中の甌皮岩人も近く、両者の間の過渡的な段階の代表ということである。

説明を聞いた後入洞したが、あつけないほどちよつぴりしたものであつた。洞穴の前には大きな湖が広がり、風景は絶景であつた。近くのレストランで夕食、その前に瑤族（ヤン族？）の歌舞を見た。素朴な踊りであつた。この料理は民族料理と聞いたが、最高に美味でサービスも上々であつた。

ホテルに帰つてやれやれとほつとしていたところに集合がかかる。周先生の今後の日中學術交流についての提案があるというのだ。提案の趣旨は近々請われて白蓮洞博物館長になること、将来ここに研修センターをつくる計画がある。その際日本の学者に研究員を委嘱し、ここを日中學術交流のメッカにしたい。柳州市も日本の都市との提携に意欲的である。といったようなことである。

提案のあと、日本人間で改めて自己紹介をしあった。周先生の口出しで時間がかかりイライラした。

今回の出席者で非専門家は大阪歯大の生物学者、滋賀大の法学者、中学の美術教師、それに会社員と私の五人だけであつた。会社員の言動はいささか私の響ひびをとかつた。

二宮先生はお疲れの様子、本日は雑談も少し。学生を連れて中国を旅行中の別大助教授利光氏らが本日合流した。氏は私の同級生正興氏の息であり、名乗って声をかける。

【十一月二十三日】

七時三十分ホテル出発、今日もパトカー先導、ホテルの豪華さといい、扱いの鄭重さといい国賓なみの待遇である。柳州政府はこのシンポジウムに六百万円出していると聞いたが、ギブ・アンド・ギブは中国では考えられないことである。とすると柳州政府の魂胆こんたんは何か。周さんどういふ役割を果たそうとしているのか。気になるところである。

本日から発表に入る。別府大橋教授・東京・岡山・同志社大・東京都埋蔵文化センター・ベトナム在西村氏が発表する。門外漢の私には殆ど理解できなかつた。討議の時間は僅か六分で午前を終わった。

午後心待ちにしていた柳江人洞へ。起伏の多いでこぼこ道を車に揺られてかなりかかったようにある。行きどまりで車を降り、なだらかな道を登っていくとそう高くない草山の中腹あたりに岩場が見える。そこが柳江人洞穴である。何の変哲もない小さな洞穴でがっかりした。

柳江人とは、ここ柳江県の通元岩をいう石灰岩質の岩山から発見された化石人骨をいう。たまたま燐分の多い洞穴中の土を肥料用に採取していた農民が、動物や人の骨を発見したもので、人骨の正確な年代はわかっていないが少なくとも山頂洞人よりは古く、一説では四万年以上のものではないかといわれている。最近の研究では、日本の港川人に類似していることが明らかになった。聖嶽人は山頂洞人に似ているというから、日本人の祖先は中国南部や北部に住んでいて、大陸と続きだつた時代に日本列島に移り住んだものと考えられる。ここ柳州で、中日古人類の淵源えんげんをさぐるシンポジウムが開かれた理由

が納得できるというものだ。

柳江人洞を見学した後、再び会場に戻って中国側の発表を聞いたが、通訳を介しての説明はいつそう理解しがたかった。休憩後次の発表を待ったが、予定変更でこれが中止になった。その間日中の学者は展示品をためつすがめつし、研究に余念がなかった。このシンポで私が学んだことの第一は学者の学問に対する情熱のすざましさ、<sup>しんけん</sup>真摯な学究態度ではなかったかと今振り返っているところである。

夕食は周先生の後援者が経営するレストラン。にぎやかな通りにあったので多分市内であろう。行く途中工事中の箇所がいくつかあつてバスが一時停車したが、その間窓から帰宅を急ぐ人の群れを興味深く観察した。自転車の氾濫のさまに圧倒され、中国民衆のエネルギーを感じた。夕食はいつも日中隣合わせで席に着くが気の重いことであつた。この料理は私の口には美味とは感じなかったが、他の人には好評のようであつた。そろそろ日本食が恋しくなつたのかもしれない。

朝は早いしホテルに帰るのは遅く疲れがたまつてきた。このまま休みたいが九時三十分、トン族の茶の接待があるから集まれという。下に下りて茶の接待を受け、料理をいただきながら歌を聞き踊りを見る。国賓待遇ならではのもてなしであつた。この席で前記利光君のハーモニカに合わせて、女性研究員が「北国の春」を日本語で歌つたのには感動した。二宮先生の「宇目の唄げんか」あまり受けなかつた。途中で抜け出し売店で土産を買う。元を使い残すのはもつたいたいとあれこれ見つけろろが、これとは思ふものはなかつた。

#### 【十一月二十四日】

苗族地区の見学、最も楽しみにしていた日である。行程がきついことから全員中国医師の診察を受ける。血圧が少々高くあやうくセーフで参加できた。まだ薄暗い早朝六時三十分出発、朝食・昼食携行といつてもパンとソーセージにゆで卵といった簡単なもの。

二号車に乗車、一号車には医師が同乗していた。途中の風景は岩山あり、草原あり、田園あつて目を楽しませてくれた。

トイレ休憩したところで二号車の異常に気づき、点検の結果車輪が折損していたらしく、二号車組は余裕のある他の車に分散乗車させられた。私と小片教授は中国車に収容された。汚い車両で窮屈であったがそれは我慢するとしても、中国の人の喧騒けんそうぶりには閉口した。食べ物のかすを車内に吐き散らすは、窓からものをなげすてるはでマナーの悪さに驚き、これが中国のインテリの所業かと腹立たしさを覚えたことである。

融水を過ぎるまではまあまあ道路であったが、未舗装の山道にかかってからは状態は一変した。ひどいでこぼこ道で、車はドスンと腹を打ちその都度はねあげられ、前の車の土ぼこりで車内はざらついて気持ちの悪いことといったらなかつた。

途中車や人を渡す渡し場があつた。少し下流で架橋工事が行われていたから臨時のものであろう。川幅は三、四十尺、清冽な流れであつた。魚影はあまりなかつた。僅かな時間待ちの客をあてこんで物売りが兩岸に露店を出していた。ゆで卵が一個〇・三元、日本円にして三・六円で安い。卵の色合いは煮つめて相当なものであつたが結構うまかつた。

川を渡ってからの道はもっとひどかつた。切り立った断崖と千仞の谷を仰ぎ、また見下ろして肝をつぶすような箇所も多かつた。道路拡幅中の現場を通りぬけたが機械類はまったく見かけなかつた。素手で一つ一つ石を運ぶのどかな工事風景であつた。六時間ほどかかつてやつと苗族の村に着いた。

苗族は華南からインドネシア半島にかけて住む少数民族である。村は貝江の流れに突き出した小さな丘陵上にあつた。村の名を正確にいうと、広西チワン族自治区融水苗族自治県安泰郷白竹屯というそうである。人口五百戸数八十である。民族衣装を着飾つた老若男女が出迎えてくれ、村の中央広場で歓迎行事を行つてくれた。その様子と儀式の意味については別府大の後藤宗俊教授が大分合同新聞に、「中国・苗(ミャオ)族の高床集落とまつり」と題して紹介している

高床式の建物群、電灯がなく薄暗く調度品も殆どない建物内部、牛や豚等の家畜との共生、貝江の深い谷を隔ててみる対岸の見事な棚田はまさに耕して天に到るである。藁葺き屋根の黒板一枚だけの粗末な学校、涙が出そ

うになった。しかし、児童が置き忘れたのか一冊の教科書があったが、しっかりした内容のものでこんな奥地の少数民族の集落でも教育が行われていることへの感動、地面に「老塞」と書いて私を我が家に案内しようとしてくれた人懐っこい老爺、愛らしい少女の刺繡の実演、見かけは悪いが食って珍味の伝統料理でもてなし等々、みどころが多く感動いっぱいの見学であった。

三時三十分帰路につく。融水に着いた時は夜になっていた。ここにはちよつとした町並みがあり人出で賑わっていた。夕食のテーブルは周先生と隣合わせ、周先生は忙しくてかまってやれなくて……と恐縮してみせたが、こゝでも聖嶽との交流を話題にした。周先生の執念を感じ、今後何らかの提案があるに違いないと身構えをしたような次第である。

中日の学者先生はお互いに乾杯を繰り返して打ち解けていき、ついには歌もとびだしちよつとした宴会になってしまった。周先生、二宮、橋先生と立ち上がって「赤とんぼ」を歌ったがいい気持ちであった。ここの料理も極めて美味、中国料理のうまさ堪能の旅でもあった。ホテ

ルに着いたのが十時半、さすがに疲れた。二宮先生もお疲れの様子であった。

【十一月二十五日】

ホテルから会場へ、小片教授の発表はスライドを使ってわかりよかつた。発表内容の紹介は別の機会に譲ることにする。日本最後の発表、京大の片山助教授の話は面白かつた。中国側の発表は一本だけ、日本側により発表の時間をさいてくれたようだ。予定がしばしば変更され中国側は割をくつたようである。

以上で五日間にわたるシンポジウムは幕を閉じた。非専門家の私にはこのシンポの正当な評価はできないので、日本の学者連に聞いてみたところ、レベルの高い会議で参加した甲斐があつたと言っていたから、大成功であつたといえるのではないか。私にとつては見る、食うで満足この上ないことであつた。よい研修の機会を与えて下さつた周先生、二宮先生それと「聖嶽人」に感謝申し上げる次第である。

午後一時半から大会を記念し、今度更に日中の学術交



流が継続発展するように願って記念植樹が行われた。この日、深紅のチャイナドレスに身を包んだ中国女性が接待に当たったが、どれもこれも妖艶な美女であった。白蓮洞登り口の広場で記念撮影、賣蘭坡、安志敏先生はひっぱりだこだった。再びここを訪れることもなからうが日中友好親善のあかしとして、この銀杏の木が何百何千年の年輪を刻んでほしいと願ったことである。植樹を終えてはじめて早い時刻にホテルに帰った。

二宮先生と町をぶらつき買い物でもしましうかと話していたところへ、またまた時間の変更で午後十時予定の協議を今から行うので、ロビーに来てくれと連絡があった。

協議は別府大学・本匠村教育委員会対白蓮洞博物館・柳州市、出席者は別大の二宮、橘先生と本匠村教育長の私、向こうは柳州政府文化局次長と周先生。中国の提案は日本における研究や産業、経済の交流拠点を別府大学に置きたいこと。聖嶽洞と白蓮洞の姉妹洞関係の締結をしたいことであった。これらは予感はしていたが、将来的にはともかくとして即答はしかねる、今後実現に向け

て協議を重ねていきたい答えるにとどめた。柳州市はこの大会を機に日本の都市と姉妹関係を結び、経済交流の足場をつくりたい意向のようである。話が思った方向に進展しないので次長の表情にいらだちがみえ、日本側が緊張する場面もあった。柳州市が多額の金を出し、我々に国賓並のもてなしをしてくれたねらいはこの対日戦略にあったに違いないと勸練ったことである。結局この話は今後の課題にしようということになった。

出国前に何か土産を用意しておくがよからうと二宮先生からアドバイスがあったので、時計二個と電卓十個ばかり持ってきたのが役立った。次長と周先生に時計を贈った。柳州政府からは壁掛けを記念としていただき、周先生はわざわざ部屋まで訪ねてきて中国酒二本と健康器具をお土産と渡してくれた。

会議も終わった。六時二十五分、お別れパーティを開く。賣蘭坡先生の誕生祝を兼ねた形になる。橘、二宮先生挨拶、周先生、柳州政府代表、ベトナム代表の挨拶があつて会食となった。部屋で二宮先生と今回の研修の総括をした。

【十一月二十六日】

柳州ともお別れである。朝間、先生と柳侯公園内を散歩する。柳州発十一時四十五分、桂林に三時ごろ着いた。車内で昼食、鈴木教授と話す。桂林から空路香港へ。レストラン「北京樓」で北京料理を味わう。ペキンダックを賞味し麵づくりの名人芸を見る。その後免税店で買い物をする。香港島のリーガルホンコンホテルに泊まる。

【十一月二十七日】

再び免税店に立ち寄る。「東海」で昼食、空港で大阪・東京組と別れる。十四時三十五分発台北經由福岡へ、台北では機内で五十分待ち、小片先生の隣の席であったので、飛行中人類学の話を拝聴することができ有益であった。先生も聖嶽人発見地の教育長にあえたことを喜んで下さった。先生には矢野徳弥さんの論文の校正もお願いし、お世話になったがよく研究していますねと感心されていた。二十一時無事福岡空港着。博多発最終に乗り佐伯に五時過ぎに着いた。いい研修の旅をさせて下さった日中関係者の皆さんにただただ感謝である。

## ◆お知らせ◆

聖岳では十二月中旬から二週間の予定で、文部省科学研究班による現地発掘調査が行われることとなりました。これに伴い本匠村では進入路等の整備を行いません。

史談会では完了後発掘に先き立ち、見学会を開催したいと考えており、時期としては十一月下旬か十二月上旬を予定しています。